

平成 30 年 3 月 9 日

各 位

会社名 インスペック株式会社
 代表者名 代表取締役社長 菅原 雅史
 (コード番号：6656 東証第二部)
 問合せ先 取締役管理本部長 富岡 喜榮子
 TEL 0187-54-1888 (代表)

のれんの減損処理（連結決算）並びに連結子会社株式の減損処理による特別損失（個別決算）の計上及び連結業績予想の修正に関するお知らせ

当社は、平成 30 年 4 月期第 3 四半期決算において、下記のとおり、のれんの減損処理（連結決算）及び当社が保有する連結子会社の株式の減損処理（個別決算）を行い、特別損失の計上をお知らせするとともに、最近の業績の動向等を踏まえ、平成 29 年 12 月 8 日に公表しました平成 30 年 4 月期（平成 29 年 5 月 1 日～平成 30 年 4 月 30 日）通期連結業績予想を、下記のとおり修正いたしますのでお知らせいたします。

記

1. 特別損失の計上

(1) のれんの減損処理（連結決算）

スイスにて精密基板製造装置関連事業を展開する当社の連結子会社である First EIE SA は、2 期続けて黒字を確保しているものの、当初想定した利益計画を下回って推移していることから、当社は First EIE SA の今後の計画の見直しを行いました。その計画に基づき、当該事業の取得時及び追加取得時に発生したのれんの回収可能性の検討を実施したところ、のれんの減損損失として 274 百万円を特別損失として計上することとなりました。

(2) 連結子会社の減損処理による特別損失（個別決算）

上記の特別損失の計上を踏まえ、当社が保有する First EIE SA の株式について再評価を行った結果、関係会社株式評価損として 506 百万円を特別損失として計上することとなりました。

なお、個別決算で計上されるこの特別損失は連結決算では消去されるため、連結業績に与える影響はありません。

2. 連結業績予想数値の修正

平成 30 年 4 月期（平成 29 年 5 月 1 日～平成 30 年 4 月 30 日）

(単位：百万円)

	売上高	営業利益	経常利益	親会社株主に 帰属する 当期純利益	1 株当たり 当期純利益
前回発表予想 (A)	2,650	65	46	57	17 円 49 銭
今回発表予想 (B)	1,900	△246	△266	△455	△142 円 14 銭
増減額 (B - A)	△750	△311	△312	△512	—
増減率 (%)	△28.3	—	—	—	—
(ご参考) 前期実績	2,159	136	134	106	40 円 81 銭

3. 連結業績予想の修正理由

当社は、平成 29 年 6 月に発表した中期経営計画の成長戦略の基本である三つの主力製品分野（ロール to ロール型検査装置・インライン検査装置・超精密基板向け検査装置）に注力して事業活動を推進しております。その中で、特に高い成長が期待できる FPC（フレキシブル基板）向けのロール to ロール型検査装置を新たに開発し、市場開拓に努めてまいりました。その結果、FPC 市場におけるトップグループのメーカー複数社との新規取引を獲得し、成長戦略の確たる足がかりを築くことができました。

一方、FPC 市場における高速高性能の検査装置のニーズは確実に高まっており、検討を始めている顧客との商談案件はこの 1 年で大きく増加しているものの、各社とも精密なパターンを持つ基板の開発に時間を要しており、市場全体としては設備の導入時期が当初見込んだ時期よりも半年から 1 年ほどずれ込んでおりますが、年明けから計画していた受注が順調に積み上がってきております。この様な状況下において、売上高に關しましては平成 30 年 4 月期における受注計画のうち幾つか主要案件がずれ込んでおり、今期の売上計上には至らないものと予想しております。

また、連結子会社 2 社においては、精密基板製造装置関連事業（First EIE SA）では、今後の事業拡大のために工場移転を実施したことからその間に十分な営業活動ができなかったこと、デジタルパソロジー関連機器事業（クラーロ株式会社、以下「クラーロ社」といいます。）では、新規開発案件に注力し、その販売活動を開始し商談に結びついているものの受注がずれ込んでいるため、今期中の売上が見込まれない見通しとなりました。その結果、グループ全体としての売上高は当初計画を下回る見込みとなりました。

利益に關しましては、半導体パッケージ・精密基板検査装置事業（当社）においては、新規顧客・案件が多かったことから、設計開発費用・立上費用・アフターフォロー等の原価が通常より割増しになったことと、売上高の計画未達に伴って売上総利益が減少いたしました。

また、連結子会社においては、今後の事業拡大に備え、工場・事務所等の設備の充実と共に人員の増強を図ったことによる人件費の増大、新規開発案件に注力した結果、研究開発費の増大等により営業利益は△246 百万円（前回予想は 65 百万円）となる見通しであります。

経常利益は営業利益が減益になる見込みであることから、△266 百万円（前回予想は 46 百万円）となる見通しであります。

親会社株主に帰属する当期純利益については、上記修正の理由と合わせ、冒頭に記載ののれんの減損処理を行い、特別損失を計上することから、通期の親会社株主に帰属する当期純損失は 455 百万円（前回予想は親会社株主に帰属する当期純利益 57 百万円）の見通しとなりました。

4. その他（現在の取り組みについて）

上記記載のとおり、当社が戦略的に取り組んでいる主力製品分野（FPC 向けロール to ロール型検査装置・チップ部品向けのインライン検査装置・クラウドサーバーの継続的な拡大や AI の急速な進化の対応で微細化が加速している CPU や GPU 向けの超精密基板向け検査装置）の引合いは堅調に推移し、国内・海外の有力顧客との商談が進んでおります。

連結子会社 2 社においても、スイス：First EIE SA では、工場移転に伴い業務効率が大幅に向上し、コスト競争力がより強化されたことに加え、2017 年 11 月にドイツ・ミュンヘンにて開催されたプロダクトロニカ 2017（国際電子部品製造機器専門見本市）で発表した新製品の商談が順調に進んでおり、今後、新製品を含めたラインナップの拡販に注力してまいります。

また、クラーロ社では、平成 29 年 12 月 25 日に開示した「当社子会社の新製品のリリースに関するお知らせ」のとおり、国内市場のみならず海外市場も視野に入れ、当該新製品を主力とした受注活動を強化するための販売体制を整え、さらにはソフト開発・システム開発等のエンジニア、品質保証体制強化に対応する人材を確保するなど大幅に体制を強化し、今後の新製品の高度医療関連機器開発に向けた体制を構築しております。

以上のように、当社グループ全体で今期の活動を土台にして、早期の業績向上を目指してまいります。

(注) 本資料に記載している業績予想等に関する将来に関する記述には、発表日現在において入手可能な情報から得られた判断に基づいており、実際の業績等は様々な要因により大きく異なる可能性があります。

以上